

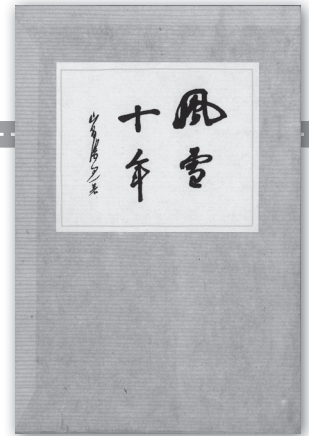
本の散歩道

風雪十年

山縣 勝見 著

財団法人海事文化研究所
(現在の山縣記念財団)

昭和34年12月1日 発行



中学・高校の頃、日本史の授業はたいてい近現代史まで辿り着けなかった。今思えばあれはわざと教師が教えるのを避けたのではなからうか。この時代は、口に出して冷静かつ平易に解説することができないような何とも言えない煩わしい妖気をまとっている。

わが国の現代史は1945年すなわち昭和20年に幕を開ける。この年、日本はポツダム宣言を受諾して終戦を迎えた。それから1952年（昭和27年）までわが国は連合軍に占領されていた。この年にサンフランシスコ講和条約が成立して、日本は国際社会に復帰したのである。

著者は「風雪十年」を終戦の年の昭和20年から筆を起す。昭和25年の9月22日、米国政府は「降伏後の初期における対日管理方針」を発表した。その中に、「非軍事化目的達成に必要な範囲に日本商船を制限する」との記述が見える。連合軍はわが国海運の活動を厳しく制限した。戦争を通じて海運が果たした役割は、無視し得ないものがあったのであろう。わが国海運の息の根を止めることで、連合軍は日本の徹底した非武装化を図ったのである。

それからの、海運の再建と独立についての歩みを本書はサンフランシスコ講和会議の舞台裏を明かしながら、つぶさに記述している。最初、わが国に許された船腹量は150万総トンであり、近海航路のみとされていた。加えて、大型商船は戦後賠償の対象とみなされた。実質的にわが国を日本列島の中に封じ込めんとしたに等しい。これらの障害を日本政府は一つ一つ乗り越えて行った。著者は当時の日本船主協会会長としてまた参議院議員として、その中で重要な役割を演じている。

好転の端緒は、1950年（昭和25年）6月25日勃発した朝鮮戦争にあった。米国はわが国の商船隊を再建して、国際通商に参加させる差し迫った必要性を感じた。これに呼応して、政府は同年12

月「外航船腹増強対策」を決定した。

しかしながら、国際社会の日本を見る目はすこぶる厳しく、あくまでわが国商船隊が国際通商に参加することを制限あるいは抑止しようとしていた。著者は米国でいわゆるロビー活動を続ける。わが国の浮沈がかかったその模様は息詰まるようである。かような講和条約と海運協定を巡る米国関係者との折衝などは従来明かにされて来なかったものではないだろうか。

講学上この条約には、全面講和か部分講和かとの議論が国内にあった。結果として、部分講和になってしまったことは誠に遺憾であるというように学校では教わった青少年が多いのではなからうか。しかしながら、海運問題（わが国を封じ込めようとの企図。）がそこに潜んでいたとしたら、全面講和など成り立ち得なかった訳である。特に英国がわが国海運の制限を強硬に主張していたという証言は歴史の過酷さを物語っている。歴史的な資料としても貴重なものであり、今日の発展した海運業界への著者自身の貢献に対し、深く敬意を表する。著者を始めとする関係者の活躍が従来歴史の表舞台ではさほど顕れていないのは腑に落ちない思いがある。海運が韓国などと違ってあまり重要視されておらず、わが国の義務教育などでも積極的に取り上げられていない証左であろう。ダレス氏を始め米国側でわが国にとって有利な役割を演じてくれたいわゆる知日派の志も胸を熱くする。

前途有為な青少年の手に取ってもらいたい本である。購読ご希望の方は、下記に日本語版と英語版の在庫があるので、ご連絡されたい。（了）

入手先：

財団法人山縣記念財団

〒104-0032 東京都中央区八丁堀3-1-9

京橋北見ビル西館5階 TEL 03-3552-6310